

自閉症児をもつ母親の療育意識について

安 藤 順 一・宮 脇 修

Studies on the Remedial Consciousness of Mothers Bringing Up Autistic Children

J. ANDO and O. MIYAWAKI

は じ め に

一般に障害児をもつ母親は、Klaus¹⁾, Kennell がいうように、悲哀の5段階(ショック, 否認, 怒り, 悲しみ, 適応, 再起)をたどり、その養育の何たるかに目ざめていくと考えられている。したがって、療育指導にたずさわる者としては、Mannoni²⁾も述べているように、親——子ども——療育者の三者の力動的な相互関係を念頭において、親の悲哀の過程ののりこえに関与していくことが重要であると考えられる。

特に、自閉症児をもつ母親の場合、Rutter, Wing 等の研究以前は、“親が障害の原因となっている”という神話があって、いわば“病理の親”として誤解されていた点もあったので、先述の5段階に加えて、次に述べる Cantwell³⁾等の見解を加味して解釈することが望まれる。

- ・自閉症の原因としての心因説は支持することができない。
- ・自閉症児の親は、普通の親と同じであって決して特別な親ではない。
- ・自閉症児の親は、普通の共感性と社会性をもっていて、神経症傾向をもっていない。
- ・自閉症児の親に思考障害は特に見られない。
- ・自閉症児と家族との対人関係パターンは、他の発達障害児の親と異ならない。

さらに、上記のような視点変容とともに、1967年頃から、Schopler⁴⁾等の TEACCH-PROGRAM では、親を“共同治療者”(parents as co-therapists)として位置づけ、次のように、親・家庭の積極的役割を呈するに至った。

- ・子どもについてよく知っているのは、療育援助者以上に親である。
- ・療育援助者は、子どもとのかかわりにおいて、非連続的であり、親のように連続的・運命的でない。
- ・治療や教育の場は、専門機関だけでなく、生活の主要な時間となる家庭こそ大切な場である。

このように、療養に関しても、自閉症児をもつ親の立場が再認識されてくると、療育援助者の援助の在り方が問われることになった。もちろん、自閉症児をもつ親が、はじめから共同治療者として、療育指導できるわけではない。やはり、Klaus, Kennell, Rosen, Drotar, 三木等が説くように、いくつものクライシスを乗り越えて共同治療者となり得るのである。

療育援助者は、親のクライシス乗り越えの過程で、その不安とか悩みを共感し、Mannoni⁵⁾も指摘しているような集合的表現 (discour collectif) に関心をもって、ともに歩むことが望まれる

のである。

こうした意味で、わが国においてもこれまで、稲浪⁶⁾、新美⁷⁾⁸⁾⁹⁾、篠崎¹⁰⁾、山本¹¹⁾等をはじめ“障害児を持つ母親の心理”の研究が次々に行われるようになってきた。

本来、親の療育意識といったものは、caseによって、そのおかれた立場や環境、子どもの障害の程度などによって異なってくるもので、横断的に調査し、推計学的に確認しても、それを確かに把えることは難しい。このことを念頭におきながらも、本研究は、稲浪等の研究方法に倣い、質問紙法によって母親の療育意識を、まず理解することとした。

調査の方法と対象

調査に当たって、石井等が行った精神発達障害指導教育協会の“精神発達障害児をもつ親の療育態度調査”¹²⁾の item を参考にした。調査内容として、④障害に対する積極的認知、⑤障害に対する消極的認知 ③過干渉・過保護という三つの観点から ④……13、⑤……12、③……5の配分で、母親の療育意識を知るための項目 30 を作成した。

なお、このほかに、“自閉症児の親は、子どものしつけに何を重視しているか”という観点で、(A)対人的価値…4、(B)個人的価値…4、(C)身体的価値…2の割で10項目を設定した。

また、現在の子どもの症状、その症状に対してどのような方策をもっているかについても調査した。調査回答者は、表1のように135名で、すべて岐阜・愛知県下の自閉症児をもつ母親である。アンケートの様式は無記名で、調査結果の回答率は67.5%であった。

なお、回答を得た自閉症児の現在年齢は表1の示すとおりで、子どもの異常に気づいた年齢は、表2のようで、殆どがWHOの定義にあるように生後30ヶ月以内に自閉症と診断されているケースばかりである。

分析にあたって、子どもの生活年齢(小学校段階・中学校段階・義務教育終了後段階)による違いとか、教育的処遇(小・中学校の通常学級、小・中学校の特殊学級、養護学校)による相違とかの検討を、今回は省略し、30項目回答の全体的傾向と、親が子どものしつけに何を重視しているか、この2点について報告することにした。

なお、自閉症児をもつ親の場合(本調査によるもの)と、障害児全体の親の場合(精神発達障害

表1 調査時の年齢

| 年 令 の 段 階 | 頻 数 |
|--------------|-----|
| 6 歳以下 | 2 |
| 6 歳～11歳 | 59 |
| 12歳～14歳 | 50 |
| 15歳以上 | 22 |
| 年齢不明(年齢欄無記入) | 2 |
| 計 | 135 |

表2 子どもの異常行動に気づいたとき
(子どもの年齢)

| 年 令 | 頻 度 |
|--------------|-----|
| 0 : 0～0 : 5 | 1 |
| 0 : 6～0 : 11 | 3 |
| 1 : 0～1 : 5 | 38 |
| 1 : 6～1 : 11 | 20 |
| 2 : 0～2 : 5 | 46 |
| 2 : 6～2 : 11 | 4 |
| 3 : 0～3 : 5 | 16 |
| 3 : 6～3 : 11 | 2 |
| 4 : 0～ | 3 |
| 無 記 入 | 2 |
| 計 | 135 |

指導教育協会調査によるもの)との比較を行うことにより、障害児の中でも療育困難といわれる自閉症児の場合の問題性をあきらかにしたいと考えた。

結 果 の 考 察

1. 自閉症児をもつ母親の療育意識

(1) 障害に対する積極的認知に関して

まず、本調査の自閉症群と、精神発達障害指導教育協会による障害児全体群(主として精神薄弱児)との比較を χ^2 検定によって両群にはっきりと差のみられる項目をひろいあげてみた。

表3における、×印は設問に対する「いいえ」△印は「どちらでもない」○印は「はい」を意味する。又表中の数字に under line のあるものは、自閉症群と障害児全体群との間に有意で明確な差を認めたものである。

さて、両群を比較検討してみると、次のことがうかがえる。

- ① 障害児をもつことによって、その育て方を夫婦で話し合う頻度は、両群とも極めて高い。自閉症群の場合、その傾向が障害児全体群に比べ、より高いといえる。(項1)
- ② だが、自閉症群の場合、そのことが家族全体の協力姿勢にまでつながっているかどうかの問題になると、必ずしもそういい難いものがある。(項13)
- ③ 家族の中の障害児の存在については、両群とも否定的ではなく、むしろ“この子を通して生活の充実感を味わっている”という感じ方が、かなり高い。(項24)
- ④ 自閉症群は、障害児全体群に比べ、他の障害のジャンルにも関心を払い(項23)他の障害児の世話をしたり(項29)、新しい友人や他者との交流を求めようとする気持ちが強い(項30)と考えられる。
- ⑤ 両群とも、“障害を正面から捉え”“努力すれば子どもは変わっていく”“子どもを励ます”

表3 障害に対する積極的認知(障害児全体と自閉症の比較)

| | 親の立場 療育意識項目 | | 障 害 児 全 体 | | | 自 閉 症 | | | χ^2 |
|-------|----------------|---------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|----------|
| | | | × | △ | ○ | × | △ | ○ | |
| 障害の認知 | 3 | いろいろな知識を得たい | 5.5 | 3.7 | 90.8 | 1.7 | 8.5 | 89.7 | |
| | 14 | 障害を正面からとらえる | 4.0 | 4.9 | 91.8 | 0 | 6.8 | 93.2 | |
| | 4 | 成長のための助言がほしい | 6.8 | 3.2 | 90.0 | 0 | 8.5 | 91.5 | |
| 評 価 | 30 | 新しい友人、他人のつながり | <u>19.9</u> | <u>21.4</u> | <u>58.6</u> | <u>1.7</u> | <u>12.0</u> | <u>86.3</u> | ** |
| | 24 | 生活の充実はこの子のおかげ | <u>25.0</u> | <u>30.0</u> | <u>44.9</u> | <u>2.6</u> | <u>53.0</u> | <u>44.4</u> | ** |
| 期 待 | 2 | 一緒にやることが楽しい | 13.0 | 24.5 | 62.5 | 6.8 | 35.9 | 54.3 | |
| | 15 | やればできると励ます | 8.3 | 11.4 | 80.1 | 0 | 20.3 | 79.9 | * |
| | 6 | 努力すれば子どもは変わる | 3.1 | 3.3 | 93.6 | 1.7 | 12.0 | 86.3 | |
| 家庭の支持 | 5 | 精一杯発揮する力がある | 20.1 | 19.8 | 59.6 | 21.4 | 26.5 | 50.4 | |
| | 1 | 育て方を夫婦で話し合う | <u>21.6</u> | <u>13.0</u> | <u>64.8</u> | <u>8.5</u> | <u>26.5</u> | <u>65.8</u> | * |
| | 13 | 協力的で家族が円満 | 6.5 | <u>14.5</u> | <u>79.1</u> | 5.8 | <u>31.6</u> | <u>52.8</u> | * |
| 社 会 化 | 23 | 違う障害児をもっと知りたい | <u>51.9</u> | <u>13.8</u> | <u>34.2</u> | <u>10.3</u> | <u>45.3</u> | <u>44.4</u> | ** |
| | 29 | 他の障害児の世話をする | <u>72.7</u> | <u>9.0</u> | 18.2 | <u>44.4</u> | <u>30.0</u> | 25.6 | ** |

という積極的な指導意欲をもち、“いろいろな知識を得”さらに“子どもの発達のための助言”を強く求めていることがうかがえる。(項 14, 6, 15, 3, 4)

(2) 障害に対する積極的認知に関して

障害に対する消極的認知とは、子どもの障害を本当は認めたくないが、認めざるを得ない立場に追いこまれ、あきらめと希望が交錯する認知状態をいう。そうした認知状況では、障害をもつ子どもに拒否的感情を抱いてしまったり、それゆえの罪障感に悩み、積極的な生への姿勢をくずしてしまったりするようなことがおきやすい。

さて、自閉症群と障害児全体群との比較であるが、およそ次のようなことが考えられる。

- ① 全般的にみて、障害児全体群は、“気に入くわないと子にあたる”(項 10)とか、“後始末に追われて疲れる”表 4 (項 9)など、子どもを拒否したり、あきらめたりする傾向は、少ない。これに対し、自閉症群は、“どちらともいえない”という中立反応が多い。
- ② このことは、自閉症児の場合多動・奇声・自傷行為などの逸脱行動が多いため“目を離すと行方不明になる”“自分勝手な行動があり、気に入くわないと大声をあげる”“大食、肥満のため重くて扱いにくい”などと、アンケートにもこのような記述がみられるように、それらの行動ゆえ、心をゆさぶられ、体も疲れはててしまうことから起こるのではなからうか。

このような“自閉症児を持つ母親の大変さ“については、久保¹³⁾、安藤¹⁴⁾等の研究でも明らかであるが、母親の慢性的な精神的・肉体的疲労状態は、自閉症児をもったことのない母親には想像を超えるものがある。

このように考えると、自閉症群に“どうして自分はこんな目に会うのか”といった感情への否定(項 12)が、障害児全体群と比較して低いのをみるのは、当然なのであろうか。

- ③ “あきらめ”のメカニズムとして、item 設定の上で選択した項 26, 項 17 に関して、自閉症群は“努力しても子どもは変わらない”(項 26)にはっきり否定しつつも、“この子はこ

表 4 障害に対する消極的認知(障害児全体と自閉症の比較)

| 療育意識項目 | | 親の立場 | | | 自閉症 | | | χ^2 |
|--------|---------------------|-----------|------|------|------|------|------|----------|
| | | 障 害 児 全 体 | × | △ | × | △ | ○ | |
| 拒否 | 10 気に入くわないと子にあたる | 69.8 | 9.5 | 20.7 | 47.9 | 28.2 | 23.9 | * |
| | 9 後始末に追われ疲れる | 66.9 | 11.1 | 22.0 | 43.6 | 35.0 | 21.4 | * |
| あきらめ | 26 努力しても子どもは変わらない | 87.8 | 6.7 | 5.5 | 73.5 | 25.6 | 0.9 | |
| | 17 この子はこれ以上よくなならない | 85.3 | 10.1 | 4.5 | 8.5 | 24.8 | 66.7 | ** |
| 障害の否定 | 20 普通児に追いつかないかといらだつ | 56.4 | 8.1 | 35.5 | 66.7 | 20.6 | 12.8 | ** |
| 転嫁 | 28 うまく接してくれればよくなる | 42.2 | 28.2 | 29.4 | 7.7 | 42.7 | 49.6 | * |
| | 22 よい薬があればよくなる | 70.1 | 17.6 | 12.2 | 53.8 | 35.0 | 6.4 | |
| 孤立化 | 25 近所の人にひけめを感じず | 52.5 | 9.2 | 38.2 | 26.5 | 20.5 | 53.0 | ** |
| | 19 人前に連れだすと緊張する | 58.2 | 10.2 | 31.5 | 27.4 | 23.9 | 48.7 | ** |
| 重圧感 | 11 この子を持って情けない | 44.2 | 14.0 | 41.9 | 23.9 | 24.8 | 51.3 | * |
| | 18 この子がいなければ気楽に外出 | 38.2 | 12.8 | 49.0 | 31.6 | 32.5 | 35.9 | * |
| | 12 どうしてこんな目に合うのか | 48.0 | 16.5 | 35.5 | 31.6 | 34.2 | 34.2 | * |

れ以上よくならない”(項 17)に肯定的応答が見えている。このことは、単なる偶然なのか、あるいは交錯した心情が矛盾的に表れているのであろうか。

- ④ 先に、積極的認知に関する考察で述べたように、正しく障害を認知しつつも ある種の期待感をもって養育に努めようとしていることは明確である。

しかしながら、“周りの人がうまく接してくれればよくなるはずだ”(項 28)に自閉症群がより高い percentage で、そのような傾向を示しているのは、他から理解されにくい自閉症の状態像のせいであろうか。

- ⑤ また、“近所の人にひけ目を感じずる”(項 25)“人前で緊張する”(項 19)等の傾向は、自閉症群の方に多くみられ、ある種の孤立化にひっぱられやすい状況をものがたっている。

このことも自閉症児の顕著な逸脱行動が原因であるかもしれない。

(3) 養育における過干渉・過保護認知に関して

障害児の養育過程では、母親のある種の罪責感から、子どもへの関わり方が時には過保護となり、無関心となり、極端に相反するかたちをとってあらわれることも多い¹⁵⁾。同時に過干渉の傾向にはしったりもする。

両群を比較して次のことがいえる。

- ① 両群とも、大人が手をかしてはいけなかつと思いつつも、気がつくについで手をかしている傾向(項 27, 21)がみられるが、自閉症群の方がその頻度が高い。
- ② また、“子どもの失敗を見るのはつらい”(項 8)“ついていないとこの子は不安”(項 7)という気持ちは中立反応を加えて解釈すると、自閉症群にその傾向が強いと考えられる。

表5 過干渉・過保護認知(障害児全体と自閉症の比較)

| | 療育意識項目 | 親の立場 | | | 自閉症 | | | χ^2 |
|-----|------------------|------|------|------|------|------|------|----------|
| | | × | △ | ○ | × | △ | ○ | |
| 過干渉 | 27 大人がしてやる方が気楽 | 60.5 | 16.4 | 22.8 | 63.3 | 23.7 | 8.5 | |
| | 21 気がつくと手をかしている | 23.0 | 14.9 | 62.1 | 23.0 | 29.9 | 47.0 | |
| 過保護 | 7 ついていないと この子は不安 | 61.7 | 12.5 | 25.6 | 27.4 | 45.3 | 27.4 | ** |
| | 8 失敗するのを見るのはつらい | 73.9 | 12.6 | 13.5 | 39.3 | 33.3 | 27.4 | ** |
| | 16 どんな犠牲を払ってもよい | 26.4 | 24.1 | 49.5 | 10.3 | 41.0 | 48.7 | * |

表6 母親の気になる自閉症児の問題行動(今一ぱん困っていること)

| 困っている行動 | 頻度 | 困っている行動 | 頻度 | 困っている行動 | 頻度 |
|--------------|----|----------|----|-------------|----|
| 奇異な行動 | 25 | 攻撃的行動 | 4 | 大食、よく泣く | |
| こだわり | 23 | 肥満 | 4 | 興奮する、早食い | |
| 多動 | 15 | 性のことで | 4 | 身辺の自立ができない | |
| 大声、音声 | 13 | 偏食 | 3 | 迷子になる、水あそび | |
| 自傷 | 13 | パニック | 3 | 常同行動、夜中に起きる | |
| 一人しゃべり | 7 | ことばがでない | 3 | スローな行動 等、各2 | |
| 社会的ルールがわからない | 4 | イライラする行動 | 3 | 無答 8 | |

* 困っている行動の数は制限せず、一人で2つ以上も挙げてよいこととした

これらのことは、表6に示される自閉症児の親から見た困った行動の一覧を眺めても、その異常行動ゆえと思われる。

2. 自閉症児をもつ母親の問題意識について

——子どもに身につけてほしいと母親がねがっている内容——

この調査も、“精神発達障害児をもつ親の療育態度調査”を参考に、親が子どもに対し何を望んでいるのかの価値観を把握しようとしたものである。

価値カテゴリー (Category of Value) としては、Wapner¹⁶⁾の考え方にもとづき、身体的運動的価値 (physical value)、個人的価値 (personal value)、対人的価値 (inter personal value) の3つのカテゴリーから、次のような value items を選んだ。

- ・身体的価値：病気をしない、運動をする
- ・個人的価値：身のまわりのことを自分でやる、くせをなおす、いろいろな物に興味を持つ、簡単な工作や作業ができる
- ・対人的価値：挨拶・返事などきちんとやる、ことばや数について学習する、友だちを作り一緒に遊べる、きまりを守る

合わせて10ある価値項目に第1位から第10位まで順位をつけさせて、何を重視しているかを判断する調査であるが、その結果は、表7、8、9、10から次のことがうかがえる。

- ① 自閉症群と障害児全体群の間には、統計的な有意差をみることはできなかった。
- ② しかし、自閉症群の場合、第1位、2位、3位(表7・8)の頻度と第4位以下の頻度の間に差が認められ、自閉症群では“あいさつや返事”“ことば”“あそび・友達”など対人的価値のもの、いわゆる inter personal 態度形成への願いが強い。
- ③ それに対し、障害児全体群では、第1位が“身のまわりのこと”第2位が“病気をしない”(表10)など、personal 態度形成にまず価値をおき、ついで physical なものに目が向けられている。

表7 親の問題意識把握(子どもにとって身につけてほしいこと): 自閉症

| Value | 選択順位 項 目 | | | | | | | | | | |
|----------------------|-------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| | | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) | (7) | (8) | (9) | (10) |
| inter personal value | 1 挨拶をする | 10 | 5 | 19 | 48 | 5 | 1 | 38 | 9 | 3 | 0 |
| | 2 ことばの学習 | 16 | 4 | 13 | 40 | 14 | 2 | 10 | 21 | 10 | 7 |
| | 3 友だちをつくる | 32 | 3 | 13 | 12 | 9 | 16 | 11 | 27 | 8 | 7 |
| | 4 きまりをまもる | 12 | 17 | 12 | 3 | 13 | 18 | 6 | 10 | 19 | 27 |
| personal value | 5 身のまわりの自立 | 16 | 6 | 18 | 5 | 15 | 28 | 12 | 14 | 11 | 11 |
| | 6 くせをなおす | 12 | 5 | 19 | 9 | 23 | 16 | 11 | 16 | 17 | 13 |
| | 7 興味をもつ | 13 | 11 | 16 | 3 | 14 | 16 | 13 | 15 | 19 | 15 |
| | 8 作業ができる | 8 | 37 | 8 | 5 | 13 | 13 | 7 | 4 | 16 | 25 |
| physical value | 9 病気をしない | 12 | 16 | 9 | 5 | 11 | 14 | 10 | 20 | 19 | 17 |
| | 10 運動をする | 1 | 32 | 11 | 6 | 24 | 12 | 19 | 0 | 15 | 14 |

表8 親の問題意識把握（子どもにとって身につけてほしいこと）：障害児全体

| Value | 選択順位 | | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) | (7) | (8) | (9) | (10) |
|----------------------|------|-------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| | 項 目 | | | | | | | | | | | |
| inter personal value | 1 | 挨拶をする | 57 | 129 | 146 | 140 | 145 | 117 | 95 | 74 | 49 | 13 |
| | 2 | ことばの学習 | 40 | 22 | 34 | 56 | 67 | 93 | 104 | 148 | 193 | 218 |
| | 3 | 友だちをつくる | 88 | 144 | 150 | 151 | 145 | 111 | 70 | 49 | 38 | 19 |
| | 4 | きまりをまもる | 16 | 62 | 122 | 139 | 122 | 159 | 156 | 100 | 63 | 26 |
| personal value | 5 | 身 辺 の 自 立 | 354 | 269 | 112 | 68 | 57 | 31 | 33 | 22 | 12 | 7 |
| | 6 | く せ な お す | 24 | 39 | 57 | 62 | 74 | 75 | 107 | 114 | 143 | 270 |
| | 7 | 興 味 を も つ | 38 | 112 | 128 | 114 | 129 | 126 | 101 | 110 | 71 | 36 |
| | 8 | 作 業 が で き る | 8 | 19 | 37 | 47 | 58 | 89 | 119 | 143 | 230 | 215 |
| physical value | 9 | 病 気 を し な い | 331 | 114 | 95 | 79 | 64 | 49 | 55 | 63 | 52 | 63 |
| | 10 | 運 動 を す る | 10 | 53 | 85 | 109 | 106 | 129 | 128 | 144 | 112 | 90 |

表9 親の問題意識把握（子どもにとって身につけてほしいこと）：自閉症

| Value | 選択順位 | | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) | (7) | (8) | (9) | (10) | 計 | % | 備考 |
|----------------------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|------|-----|
| | 項 目 | | | | | | | | | | | | | | |
| inter personal value | 1 | 挨拶 | 100 | 45 | 152 | 336 | 30 | 5 | 152 | 27 | 6 | 0 | 853 | 11.3 | 1 |
| | 2 | ことば | 160 | 36 | 104 | 280 | 84 | 10 | 40 | 63 | 20 | 7 | 804 | 10.7 | 2 |
| | 3 | 友だち | 320 | 27 | 104 | 84 | 54 | 80 | 44 | 81 | 16 | 7 | 817 | 10.8 | 3 |
| | 4 | きまり | 120 | 153 | 96 | 21 | 78 | 90 | 24 | 30 | 38 | 27 | 677 | 9.0 | 10 |
| personal value | 5 | 身 辺 | 160 | 54 | 144 | 35 | 90 | 140 | 48 | 42 | 22 | 11 | 746 | 9.9 | 6 |
| | 6 | く せ | 120 | 45 | 152 | 63 | 138 | 80 | 44 | 48 | 34 | 13 | 737 | 9.8 | 7 |
| | 7 | 興 味 | 130 | 99 | 128 | 21 | 84 | 80 | 52 | 45 | 38 | 15 | 692 | 9.2 | 9 |
| | 8 | 作 業 | 80 | 333 | 64 | 35 | 78 | 65 | 28 | 12 | 32 | 25 | 752 | 10.0 | 4.5 |
| physical value | 9 | 病 気 | 120 | 144 | 72 | 35 | 66 | 70 | 40 | 60 | 38 | 17 | 702 | 9.3 | 8 |
| | 10 | 運 動 | 10 | 288 | 88 | 42 | 144 | 60 | 76 | 0 | 30 | 14 | 752 | 10.0 | 4.5 |

* 表7の頻数をもとにして第1位に10、第2位9と weighting したもの

④ このことは、自閉症児が対人接触・対人関係面で、とにかく問題行動を示しやすいので、母親のしつけ上の期待感が、そこに向いているのだとも解釈できる。

このような自閉症群の問題意識は、自閉症児の現在に目が向けられているためであると考えられる場合、その療育プログラム構成に、十分配慮しなければならない問題が残る。

表10 親の問題意識把握（子どもにとって身につけてほしいこと）：障害児全体

| Value | 選択順位 | | | | | | | | | | | 計 | % | 備考 |
|----------------------|--------|------|------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|----|
| | 項目 | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) | (7) | (8) | (9) | (10) | | | |
| inter personal value | 1 挨拶 | 570 | 1161 | 1168 | 980 | 870 | 585 | 380 | 222 | 98 | 13 | 6047 | 11.4 | 4 |
| | 2 ことば | 400 | 198 | 272 | 392 | 402 | 465 | 416 | 444 | 386 | 218 | 3593 | 6.7 | 9 |
| | 3 友だち | 880 | 1296 | 1200 | 1057 | 870 | 555 | 280 | 147 | 72 | 19 | 6376 | 11.9 | 3 |
| | 4 きまり | 160 | 558 | 976 | 973 | 732 | 795 | 624 | 300 | 126 | 26 | 5270 | 9.8 | 6 |
| personal value | 5 身 辺 | 3540 | 2421 | 896 | 687 | 342 | 155 | 132 | 66 | 24 | 7 | 8270 | 15.5 | 1 |
| | 6 く せ | 240 | 351 | 456 | 434 | 444 | 375 | 428 | 342 | 286 | 270 | 3626 | 6.8 | 8 |
| | 7 興 味 | 380 | 1008 | 1024 | 798 | 774 | 630 | 404 | 330 | 142 | 36 | 5526 | 10.4 | 5 |
| | 8 作 業 | 80 | 171 | 296 | 329 | 348 | 445 | 476 | 429 | 460 | 215 | 3249 | 6.0 | 10 |
| physical value | 9 病 気 | 3310 | 1026 | 760 | 553 | 384 | 245 | 220 | 189 | 104 | 63 | 6854 | 12.8 | 2 |
| | 10 運 動 | 100 | 447 | 680 | 763 | 636 | 645 | 512 | 432 | 224 | 90 | 4529 | 8.5 | 7 |

* 表8の頻数をもとにして第1位に10、第2位に9と weighting したもの

“障害だけが見えて、その障害をになっている子ども全体が見えていない”という堀要氏の提言を、ここで改めて思い出すまでもなく、対人関係の障害があるから、しつけはまずその面からという考え方には、いささか問題を感じる。

子どもの全人的な発達を促すのであれば、第一義的に身体的価値側面、さらに身近生活の自立、基本的生活習慣の形成という面へのチェックが望まれるのである。

特に、認知障害を中核的障害として仮定されている自閉症児の場合、その療育には、まず身体的・運動的側面、そして基本的生活習慣の形成に焦点が当てられるべきであろう。

太田¹⁷⁾も述べているように、自閉症の教育は、基本的障害の克服と代償という観点から、まず感覚運動機能の充全化と表象機能の発達に力点が置かれる。このことは、Wing や Elgar¹⁸⁾によっても指摘されている。Ayers¹⁹⁾によれば、感覚運動的治療教育は、自閉症児の複雑な運動・技能そして表象能力を養うための初歩的ステップであり、これを認知的学習に結びつけて指導することは、極めて効果的であるとしている。特に感覚的運動治療を認知学習に先行させることは、異常行動を抑制し、課題への集中性を高めると述べている。

要 約

自閉症群と障害児全体群とを比較して、その母親の養育意識をまとめてみると、次の5つに要約される。

- 1) 両群とも、障害児をもつことによって、その養育に関し夫婦で話し合ったり、その子の存在感をたしかめあったりして、そこから生活の充実感を求めようとする意識が強い。
- 2) 自閉症群は、障害児全体群に比べると、自閉症児の行動特性からして、養育に関する緊張感や不安感をいだきやすい。
- 3) 両群とも、障害児であるがゆえに、つい過干渉・過保護になってしまう傾向があり、特に

自閉症群にその度合いが強い。

- 4) 自閉症群の場合、他の障害児の指導に参加したり、新しい友人との接触を求めたりして、広い範囲での活動を求める意識が高い。
- 5) 自閉症群の場合、治療教育をすすめていくとき、その療育プログラムのセットに当たっては、親の問題意識に共感しながら、しつけの上で身体的・運動的価値、個人的価値の側面に眼を向けるよう、カウンセリングが望まれる。

この研究をすすめるに当たって、愛知県自閉症児親の会、岐阜県自閉症児親の会には、多大な御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 加藤正明, 藤縄昭, 小此木啓吾編: 家族精神医学 3, 238, 弘文堂 (1982)
- 2) モード・マノーニ, 高木隆郎, 新井清三郎訳: 症状と言葉, 235~257, ミネルヴァ書房 (1975)
- 3) E. ショプラー他, 丸井文男監訳: 自閉症, 299~324 (家族要因: 伊藤義美訳), 黎明書房 (1982)
- 4) Schopler, E: Parents as co-therapists, a paper give at the NSAC conference, Christchurch, October, National Society for Autistic children. (1972)
- 5) モード・マノーニ, 高木隆郎他訳: 症状と言葉, ミネルヴァ書房 (1975)
- 6) 稲浪正充, 西信高, 小椋たみ子: 障害児の母親の心的態度の研究, 33, 日本特殊教育研究 Vol. 18, No.3, (1980)
- 7) 植村勝彦, 新美明夫: 心身障害幼児をもつ母親のストレスについて, 18~31, 日本特殊教育研究 Vol.18, No.2 (1979)
- 8) 植村勝彦, 新美明夫: 心身障害幼児をもつ母親のストレスについて, 59~67, 日本特殊教育研究 Vol.18, No.4
- 9) 新美明美, 植村勝彦: 心身障害幼児をもつ母親のストレスについて, 20~28, 日本特殊教育研究 Vol.19, No.3
- 10) 天津政博, 桑原孝二, 甲斐原巖他 4 名: 学齢自閉症児をもつ親の問題意識について, 209~219, 熊本大学教育学部研究紀要, 人文科学第 29 号 (1980)
- 11) 山本多喜司, 谷本忠明, 古川雅文: 障害児及び健常児の母親の養育における価値観に関する研究, 237~244, 広島大学教育学部研究紀要 No.30 (1981)
- 12) 石井葉, 神田武子, 湯汲英史他 8 名: 精神発達障害児をもつ親の養育態度調査, 1~27, 安田生命社会事業団研究助成論文集, No.19 (1983)
- 13) 久保紘章: 自閉症児をもつ母親の大変さについて, 505~530, 四国学院大学創立 25 周年記念論文集 (1975)
- 14) 安藤順一: 自閉症児をもつ母親とその生活時間について, 223~232, 名古屋女子大学研究紀要, No.26 (1980)
- 15) 加藤正明, 藤縄昭, 小此木啓吾編: 家族精神医学 3, 240, 弘文堂 (1982)
- 16) 山本多喜司: 障害児及び健常児の母親の養育における価値観に関する研究, 237, 広島大学教育学部研究概要 No.30 (1981)
- 17) 太田昌孝: 自閉症の治療と教育, 4, 発達障害研究, Vol.5 No.1, 日本文化科学社, (1983)
- 18) Wing, L: The principles of remedial education for autistic children. In Wing, L (Ed) : Early childhood autism: Clinical, educational and social aspects, 197~203, Pergamon Press, Oxford (1976)
- 19) Ayers, A・J.: Sensory integration and learning disorders. Western Psychological Services. (1973), 宮前珠子訳: 感覚統合と学習障害, 協同医書出版, (1978)